

土岐善麿著「田安宗武」に對する授賞審査要旨

土岐善麿著田安宗武（四冊）は、田安宗武の生涯、特にその學術に關する全面的研究の成果である。

田安宗武は、徳川吉宗の第二子で松平定信の父である。荷田在滿、賀茂眞淵を聘して國學の道統上重要な地位を占め、自ら古學を研究して優に一家をなし、歌學に有職故實に國語學に、卓見が少なくない。また實作者として眞淵の萬葉主義を純粹に發揮したのである。

本書は、四冊から成る。今これを概観すると、第一冊は「歌作歌論」として、まず「序說環境と生涯」の篇に、十章にわたつて宗武の生涯及び環境を述べ、次に家集「天降言」の解題と、その全卷に詳細な評注を加え、また「國歌八論解說」として、在滿の國歌八論を中心とする、宗武、在滿、眞淵の三者の意見を、各論ごとに並べ舉げて、その歸するところを示し、歌人、歌學者としての宗武の地位を明らかにしている。

第二冊は、「古典論註」と題して、宗武の著書の中、「伊勢物語註」、「小倉百首童蒙訓」、「徒然草評論」三篇を解題し、中世の歌物語、和歌、隨筆の三種を通じて、宗武が古典評論をした動因について推定を試み、その獨自の見解を顯わすに努めた。

第三冊は、「古典考説」として、「摘要冠辭考」及び「古事記評説」の本文と、若干の參考文獻を收め、古事記及び萬葉集に關する宗武の業績をあげて、上代國民生活解明の努力を知るべき資料を提示し、國學史、古語研究史上におけるその地位を示した。

第四冊は、「諸著要略」と名づけ、「有職故實」の篇には、「服飾管見」、「樂曲考」以下數種に關して「服飾研究」、「樂曲研究」、「本草研究」、「玉函叢說」等の各章において、それぞれその成立事情と内容を評説し、「田藩事實」の篇には、田藩事實の記録によつて、「一家創立」、「能樂謡曲」等、第一冊の「序説」篇に誌した資料を増補し、更に「雜纂」篇には嗣子治察の追憶記等、彼の子で松平家を嗣いだ定信の「字下人言」を紹介し、また「繼嗣問題」、「在滿閉門」等の章を設けて、宗武の性情乃至身邊交渉の狀況を審らかにした。附録「田安宗武歌集」は「悠然院様御詠草」によつて「天降言」を増補し、その全作品を擧げた。

以上が本書内容の概要である。これを通覽すると、宗武に關する、特に從來公刊せられたものゝ少ない宗武の主要な著述の全貌を示したのは、國文學研究史上に宗武を見るに缺くべからざる要件を満足せしめ、またその全作品を蒐集編成したことも、歌人としての宗武を論ずるに、多大の利便を興えるもの、その生涯を考證し、その作品を評注しその著述を解説するにあつては、研究の筆を、實證的に冷靜に進めている。これらは、著者の異常な熱意と着實な努力との成果として重んずべきものである。

これを要するに、本書は、その説くところ、時に斷片的隨筆的な缺點がないでもないが、資料の蒐集とそれに関する論述とに對する著者の努力は、今より後、和歌史、歌學史、乃至國文學史、國學史を研究しようとするものに寄與するところが甚だ多く、推賞に値するものと認める。